



TITLE:

日蝕観測(昭和18年二月5日)を終つて(2)

AUTHOR(S):

木邊, 成麿

CITATION:

木邊, 成麿. 日蝕観測(昭和18年二月5日)を終つて(2). 天界 1943, 23(265): 212-216

ISSUE DATE:

1943-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168633>

RIGHT:

日蝕觀測 (昭和18年 二月五日) を終つて (2)

Solar Eclipse of February 5, 1943.

觀測部長 木邊成麿 *Sigemaro Kibe.*

2. 日蝕紀行 (1) (多少日記風に)

昭和18年一月29日、晴、二度目の日蝕觀測に、再び北海道に向け出發する。打ち合せた時刻の列車に、山口君は大津から乗車して、野洲の驛で顔を出して呉れた。正午、米原で、7年前と同じ青森行の急行に乗り込む。寒地用のブクブクの毛皮の外套を着て、背中にリュックを、手には大型トランクを(これが觀測用具入れである)、肩に黒布に包んだ三脚と四枚板の筒を擔つて居る自分は、どうもチト異様な感じを乗客に與へたらしい。

天氣は大寒とは思はれない程に穏やかである。北陸線に入つて、二三の驛を通過した頃から、地表は積雪に蔽はれ、江越境ひの柳ヶ瀬トンネル附近では、1メートルもある。其れからは、多少の差こそあれ、たゞ野も山も白皚々の北陸路の風景である。親不知の邊りで日はトツブリと暮れて、多少の小雪が降つて來たらしい。乗客の大半は下車して、極めて閑散な車中である。柏崎の邊りから寝てしまつたらしい。

一月30日、晴、秋田！秋田！と云ふ呼聲に、中年の一婦人がパタパタと降りて行つた。3時半である。カーテンを引いて外を見ると、青白い弦月が東天に冴へ、車窓の硝子に花模様様の氷が張つて居る。やがて、夜も明け、寒氣を切つて、豫定の時刻に青森に到着。直ちに連絡船に乗り込む。氣溫は -2°C 、思つたよりも暖かい。汀まで白い雪の本土と暫し別れる。白銀色に遠く八甲田の峯が浮かんで居る。戦時下、立見將軍の氣概を思ふ。船の進むにつれて、鷗が數十羽、エサを求めてか周廻しつつ飛翔する。正午に着函、直ちに列車に乗り込む。さすが北海道に來たのだ。チラホラと乗客の話題に“日蝕”と云ふ語が流れ聞えて來る。

1時間許りで大沼に出る。湖面は氷結して、其の上の積雪は、一片の汚點すらもない。向ふの駒ヶ嶽は、先年爆發したおもかげを山容に示しつつ、濛々と噴煙を上げて居る。其れが空に昇つて白雲と變つて棚引く。列車は室蘭灣に指しかゝる。灣の向ふには遠く羊蹄山が富士さながらの姿を見せて居る。空は快晴、一月にしては稀有の好晴だ。二重窓の車中はむしろ暑い程である。長萬部(オシヤマンベ)から、線路は半島を西へ横斷する。小さな急坂があるせいか、

機關車二輛で、シュシュポッポ シュポッポ と大サーピスだ。急に積雪が増して來た。地表が民家の屋根まで這ひ上つて居る様な感じがする。1メートル50位もあるのだらう。漸く人煙も稀に、北海道らしい氣分が濃くなる。馬鹿に日暮れが早い。17時半には暗くなつた。19時、札幌着。少し疲れた様だ。小さな宿に一先づ假泊する。

一月31日、雪。列車の都合上、終日小雪の札幌市中を歩き廻る。21時、根室行の急行に乗車。依然客は尠ない。トランクを持たせた赤帽が、我々を指して日蝕觀測ですかと尋ねた。職業的な「カン」の鋭さには一驚する。夜の内に狩勝を越えて居た。

二月1日、快晴。明けて二月1日。5日後の日蝕目當てに、今自分は十勝の平原を一路目的地に向つて走つて居る。帯廣を過ぎて夜が明けた。河川は一切氷結して居り、見渡した所、一軒の人家もない實に茫々たる平原である。

7時すぎ、太平洋岸に出る。丁度、太陽は日蝕當時位の高度に昇つて來たが雲の一片すらもない。雄大な眺である。正に、今次の旅行中第一にも推すべきか。其の果しのない太平洋の彼方に昇る太陽は、 10° と云つても相當に高い。これ位晴れたならば、 10° と云ふ地平高度は、普通の觀測には充分であると、早や日蝕當日に聯想がつつ走る。

9時丁度、釧路着。先發の繁さん(西村氏)が出迎へに來て呉れた。顔見知りの人に出會つて馬鹿に嬉しい。驛からシベリヤ流刑の徒が乗せられる様な、板張りの櫓馬車に乗つて、薄汚ギタナイ雪の少しばかり積つて居る釧路の街を進む。近江屋で古城君に出會ふ。早々に海軍武官室を訪れる。長の土田大佐は、本會理事中村覺氏の近親になる由を初めて話しをして居る内に知つた。奇縁の部だらう。

要談終つて、13時釧路發、電車の様に、座席の長い、しかも丸いストープの入つた。如何にも北海道らしい車輛である。全く自然のままになつた、寒帯疎林の中を東する事しばし、15時目的地厚岸に到着、直ちに驛前の五味旅館に旅装を解く。積雪は20センチ許り。

休む暇もなく、先づ海軍の出張部、學校等を訪ねて、今回の觀測に關しての諒解を求める。續いて觀測地點の撰定にかゝる。此の地は、厚岸灣から更に奥に、厚岸湖と云ふ周圍25キロもある内湖に面して居る。東方は其の内湖の前に遠くに低い山があるが、其の高度は 1° もない。觀測には絶好の場所である。16時半には暮色が迫つて來た。やはり随分東北へ來たのだ。夕闇と共に、數千百羽の鷗が、群集して湖上にガヤガヤと鳴く聲が、氷結した湖面と、背後の山に反映して、洋樂オーケストラの様な響きさへする。フト最初、港で今日は海軍々樂隊の演奏でもあるのかなと思つた程である。

歸つて、美味しい牡蠣の御馳走に満足して、早目に就寝する（アッケシとはアイヌ語で牡蠣の取れる海邊と云ふ意味だそうである。今も名産になつて居る）。

二月二日、晴。今日も快晴である。器械の組み立てを二人で行ふ。午前中に出来てしまつた。午後からは東京天文臺の観測小屋を訪れる。宿から西北半キロ許りの地點だが、70米位の小山の頂きにあるから、雪の坂道を20分許りかゝつて登る。臺長關口博士も今朝來着された。観測小屋は七棟になつて居る。恐らく一番大がかりな観測陣だらう。一行も20名に近い。自分の顔見知りも二三來て居る。あと3日に控へても、自分はノンキな氣分である。

二月三日、晴れ後曇り。朝は好天氣である。夜明は時差の関係上、京都の邊りと變りない。6時前には薄明となる。午後から曇つて來た、夕方からは雪となる。これで丁度日蝕は晴れるだらうと大して氣にしなければならなかつた。國民學校の先生達に自分等の方の應援について、萬事打合せをすませた。

二月四日、雪。盛んに雪が降る。しかも内地の様なぼた雪である。正午過ぎても一向に止みそうにない。10センチも積つたか。気温は0°位まで上昇する。明日の天候は悲觀的だ。午後から止んで呉れないと具合が悪い。

依然、香ばしくない空模様を眺めつつ、15時、國民學校へ行く、最後の練習である。定めた部署と役割は次の様であつた。

- 1) 18cm コロナグラフ、シャッターと取枠交換と案内とを自分が行ふ。但し取枠を番號順に差出し、受取るために先生二名に手傳つて貰ふ。
 - 2) 自分の持つて行つた手提げの手札型の寫眞機を學校の一先生に委せる。
 - 3) 山口氏は自用のライカ (f2) で、シャドウバンドの撮影を試みる。其して皆既1分前に18センチ機のところへ來て、僕の合圖で最終のシャッターをして後、部分蝕用から皆既用に取り換へて、其後は自由にする。
 - 4) 時計は山口氏の持参した懷中時計に頼つて、東京天文臺の豫報に従ひ、教頭の先生に“20分前、15分前、10、6.5、5、4、3、2、1分前、30秒、20、15、10、5秒、始め”の呼稱を頼む。此の時計は過去3日間の計時の結果、一日に2秒位進むと云ふ。相當信用ある結果が出て居たから、誰れかが蝕を見乍ら「始め」の呼稱する事は取り止めた。それは自分には仕事があり、他の人は初回の経験だから、むしろ失敗の懸念がある。
 - 5) “始め”の號令に従つて、別のタイマーが、メトロノームの半秒打ちをならせつつ“0”“1”“0”“2”と半秒呼びをする。この役目は主役と補助役と二名の先生に頼む。
 - 6) 其他の先生は、たゞ同一個所で黙つて見て貰ふだけとする。他からは海軍の高間氏のみで一般の人は斷る。
- 其の時、シャッターのヒモが切れて、練習を終つてから修理にかゝるが、都合

よく行かない。空は依然曇り、而も、風向は好轉しない。實に憂鬱な気分になる。面白くなく夕食を攝る。處が、20時頃、幸ひにも西天が晴れて來た。占めた!! 自分は勇躍、臨時の暗室で明日の乾板を取替中に仕込む。慎重を期して2時間許りかゝつた。其後、山口君が、懸命にシャッターの故障修理にかゝつて翌1時頃に其れが成つた。其の間、空は一時曇つたが、再び1時頃には満天降る様な星空である。二人とも茶好きなものだから、一服點茶後、床に入つた。ウトウトとする。風はあるが明日は確かに晴れだ。日蝕はさあ後!! 數時間に迫つて居るのだ。

3. 當日の様子 (日蝕紀行 2)

昭和18年二月5日。待望の日蝕當日だ。4時、もう寝て居られない。隣室の關口先生も起きて居られる様だ。常の如く朝の手水を使ふ。窓から見る東北の空には、織女の光りが青白く冴へて居る。5時前、朝食が運ばれた。所が正直に云つて、3、4日の夜が曇つたから、星像に依る焦點の試験が、未だ終つて居ないので、僕は5時半頃一足先に出掛ける事にした。

宿の玄関で東京天文臺の人々に出會ふ。今日に限つて、朝の挨拶は“快晴の様ですね”“えい、先づ天気は……”である。是れからの仕事を控へて緊張した顔付ではあるが、どことはなしに喜色が見られる。自分自身も、何んだか心豊かな氣分がする。

屋外に出る。ほのかに東天が白みかけて居る。少し風があるが、素晴らしい快晴だ!! 気温は -10°C 位、氣分を引き締める程度で申分ない。學校に一夜預けて置いた器械を慎重に取り出して据へたのが5時40分。一刻を争つて、アンタレスに向けて焦點を調べる。幸ひ星像でも、正しく焦點硝子に合つて居る。其他器械部分の點檢を行ふ。異狀なし。6時過ぎには全員が揃つた。空は明るい、一等星だけが残つて居る。少し風があるから、奉安殿の横手にある木立の間に器械を据へて、東面を除いて三方に幕を張つて觀測する事に定めた。先生達が其の準備をして居る内に、自分は器械を、山口君は乾板を運んで、傍らの机上に置き、番號順に整備されて居るかを調べて、再び黒布に包んで置く。茲に昨夜裝填した撮影乾板の要項を示す。

番號	乾板品種	型	目的	時刻	絞リ	露出	参 考
1	昭和プロセス	カビネ	部分蝕	皆既10分前	4センチ (f70)	$\frac{1}{40}$ 秒	橙 色 フィルタ
2	〃	〃	〃	〃 6分前	〃	〃	〃
3	オリエンタル プロセス	手 札	〃	〃 3分前	〃	$\frac{1}{80}$ 秒	〃
4	〃	〃	〃	〃 直 前	〃	$\frac{1}{20}$ 秒	〃
5	さくらの 三色フィルム	カビネ	皆既	20秒目	開 放	$\frac{1}{2}$ 秒	
6	〃	〃	〃	40秒目	〃	$\frac{3}{4}$ 秒	

7	オリエンタル 1200青	カビネ	皆既	60秒目	開放	$\frac{2}{3}$ 秒	
8	さくらの 三色フィルム	〃	〃	80秒目	〃	〃	
9	オリエンタル 1200青	〃	〃	100秒目	〃	$\frac{1}{2}$ 秒	
10	オリエンタル プロセス	手札	部分蝕	生光1分後	4センチ (f70)	$\frac{1}{80}$ 秒	橙 色 フィルタ
11	〃	〃	〃	〃 5分後	〃	$\frac{1}{40}$ 秒	〃
12	オリエンタル 1200青	カビネ	豫備	皆既中餘裕有る場合使用			
13	〃	〃	〃	其他臨時の補填用			

(つづく)

神戸に於ける本會の總會

(概況報告)

既報の如き次第を以つて、本會は去る六月27日13時から、神戸市神戸國民學校内に於いて、通常總會を開いた。神戸支部員諸氏の熱心なる準備により、定刻までに萬端が整ひ、12時過ぎから各地の會員が参集し、中には和歌山、廣島、愛媛あたりより來られし顔も見え、盛況であつた。

會は宮森理事長を座長として開かれ、まづ

山本會長の記念講演“天文學と國民性”があつた。會長はスペイン、イタリヤ、ドイツ、フランス、アメリカ、イギリス、ロシア等の各國に於ける天文學と學者と其の國民性について、歴史的に、又、性格批評的に論述され、我が日本の天文學界を警戒された。次いで

木邊觀測部長が“北海道の日蝕について”報告講演をされた。同氏の觀測計畫と器械設備、觀測概況から、その美しい成果を、みごとなコロナやプロミネンスの寫眞によつて示された。それから

中村事務理事の事務報告があつて、近年の頗る好況を語られた。次ぎに

高城教育部長は“最近の天文教育について”興味深く所懐を述べられた。氏の要旨は、1. 天文教育、2. 防空天文學、3. 航海空天文學、4. 作戰天文學、5. 南天の開拓の五項目について多くの暗示を與へられた。最後に、

木部部長は艫座新星の發見者中原千秋氏への表彰狀(別頁所載)を公表され、尙これに因んで **山本會長**は同星の獨立發見者15氏の報告から作つた光度曲線を解説された。

この機會に、本會の役員改選が行はれたが、その結果、會長及び諸役員は全部重任となり、只、**副會長**には木邊成磨氏と清水眞一氏とが挙げられたことだけが新しい態勢であつた。

會は17時に閉會し、尙、暫く相互の歡談が交はされた。(事務局)